

自己限定としての自由 ポストカント的な形而上学と『善の研究』の思想

「私の今日の考が多くをヘーゲルから教へられ、又何人よりもヘーゲルに最も近いと考へると共に、私はヘーゲルに対して多くの云ふべきものを有つて居るのである」(西田幾多郎)

Sova P. K. Cerda 特別研究員 PD, 京都大学大学院人間・環境学研究科

要旨

20世紀におけるドイツ観念論の研究は、ヘーゲルの思想をカントやフィヒテとの関係性の中で、文献学と思想史の両面から明確にするという成果を上げたが、この成果はアメリカの哲学界において特異な反応を呼び起こした。その理由は様々だが、その要因の一つとして、ウィルフリッド・セラーズ(1912年-1989年)の業績が挙げられる。セラーズは、感覚的な「印象」が意味の理解、つまり認識、に寄与するためには、それにさえ既に規範的な枠組みが関与していることを論じた。それは、彼の有名な言葉を借りれば、意味が「fraught with ought [当為性に満ちている]」ということを示す。あらゆる認識が規範性を伴うという考えは、カントからフィヒテ、そしてヘーゲルへと至るドイツ観念論の発展を理解しようとするアメリカの学者たちにとって、重要な手がかりとなった。この分野における画期的な著作の一つが、ヘーゲルのプロジェクトを「ポスト・カント的観念論」と特徴づけているロバート・B・ピピンの『ヘーゲルの観念論』(1989年)である。

ピピンによれば、「ポスト・カント的」とは、認識における意味と規範性の不可分な相互関係を徹底する試みを指す。カントが「内容を欠いた思考は空虚であり、概念を欠いた直観は方向を見うしなっている」(A51/B75)と述べたのは、対象の認識には既に概念が介在していることを意味していた。さらに、概念は、心理的な作用としてではなく、知の規範として機能するのである。そうするとフィヒテとヘーゲルにとっての問題は、認識における感性(つまり「直観」)の役割をどのように特徴付けるかということになる。ピピンによれば、カントが認識に課したと考えた感性による制約を両者とも退ける。カントの提案する、対象の認識には知の規範が含まれているという点を受け入れることで、フィヒテとヘーゲルは「カント的」とも言えるが、感性の制約を拒絶することで、彼らのプロジェクトは「ポスト・カント的」と理解されるべきだという。

このような展開は西田幾多郎の思索を理解する上でどのような意義があるだろうか。西田は『善の研究』の「序」で、「経験を能働的と考ふることによってフィヒテ以後の超越哲学とも調和し得るかのように考え [た]」と記している。「フィヒテ以降の超越哲学」への言及から、西田のプロジェクトも「ポスト・カント的」な意図を持つことがうかがえるだろう。本発表では、この点をどのように理解すべきかを検討する。『善の研究』のポスト・カント的な意義を掘り下げること、ドイツ観念論、特にヘーゲルの概念論との関係を明確にできるということは、本発表が議論するところである。

第 1 節ではカントと西田の共通の土台、特に「経験」の意義について考察する。第 2 節では、西田がカントによる経験理解に不満を抱き、自らをフィヒテに結びつけた理由を検討する。最後に第 3 節で、西田とヘーゲルのアプローチのつながりについて解釈を提供する。